

平成5年5月13日

激しく変わる時代を、  
ひたすら生き抜いてきた、  
89人の女性たちからの聞き書き

## 『風の交叉点 ～豊島に生きた女性たち～』第2集

区役所情報公開コーナー、区内書店で発売中

『風の交叉点～豊島に生きた女性たち～』第2集が、区の情報公開コーナー（東池袋1-18・区分庁舎A館1階）、区内の書店で発売されている。豊島区立男女平等推進センター「エポック10」編、発行ドメス出版。定価は1545円（消費税含む）だが、情報公開コーナーでは消費税分を除く1500円で販売する。発行部数は1500部。

本書は、1988年に策定された豊島区婦人行動計画『としま150プラン』でうたわれている『女性史の編さん事業』として、歴史の裏方のさらに裏方に位置づけられてしまった無名の女性たちの声や姿から様々な生き様を学び、分かち合うとともに次の時代にそれらを伝えることを目的に、昨年4月第1集が出版された。今回はその続編。

本書は、大正デモクラシー、昭和恐慌、第二次世界大戦、戦後の混乱、高度経済成長、と社会が激しく変わっていく中で豊島区で生き続けた89人の女性たちから、豊島区の呼びかけに応じた女性史編さん員25名が、丸1年をかけて、語り手それぞれの多様な生き様をインタビューし、一冊（A4判・290頁）に編集したものである。

第2集の本書では、それぞれの登場人物の生き様を、豊島区という地域性を軸に、第1章「ハイカラさんと旧家」、第2章「働き抜いて」、第3章「手をたずさえて」、第4章「戦争は二度といや」の4章にまとめている。

第1章では、「昭和初期に長崎地域に形成された『アトリエ村』」、「都市『郊外』に居を構えて、都市近郊の農村地域に異文化を持ち込んだ人たちの暮らしぶり」、「激しい地域の変化を受けながら代々続いた『家』の中で生きた女性」、以上の3点を取り上げることによって、豊島区の地域的特色を見ている。

第2章では、「今では死語になりつつある『奉公』に出された女性の姿」、「親の職業を受け継ぐことが当たり前という状況の中で家業を継いだ女性たちの葛藤」、「『ヤミ市』で知られている池袋西口で、『ヤミ市』とは一線を画したところで戦災を受けながら商売を続けた人びと」、「夫が一家の大黒柱であることが普通になっていく近代都市の中で、それを単純には受け入れずに、職業人としての腕を磨くことを通して、自分

の意思で、自分の生き方を職業に重ねていった人たち。逆に、一家の大黒柱を何らかの理由で失い、自分と子どもを養うために働かざるを得なかった女性たちの様々な生き方への模索の思考錯誤」。それらを通して、「女が働くということ」を紹介している。

また、第3章では、「家庭の中にのみ自分の生活基盤を置かずに、家庭の外での人とのネットワークを大切にしながら自分自信を表現していく女性の姿」、「夫婦を生活の基盤としながら暮らしを営んできた人たち」。これらを通して、都市ならではのと言える人々の暮らしが生んだ女性の生き方を紹介している。

さらに、第4章では、戦争を語り継ぐことの重要性を見過ごしてはならないとの意味から、戦災をかいくぐって生き延びてきた人たちの生々しい証言と、夫の戦死によって思いがけない生き方をせざるを得なかった女性たちを追っている。この章は、「わたしたちも、あの戦争を支えた加害者だと言われる。それは、理屈ではわかっているし、わかろうとしているが、私たちの体験も伝えておきたい」との編さん員たちの思いと、とにかく事実のすべてを伝えようという思いから、特におこされたものである。

ちなみに『風の交叉点』というタイトルは、乗り換え駅としての池袋にちなみ、出会う、すれ違う、立ちどまるなどの意味をこめ、『風』には力強さと優しさを求めてつけられたものである。

問合せ 豊島区立男女平等推進センター「エポック10」